

日本現代文
全集
91

神西清丸岡明由起しげ子集

日本現代文學全集 91

神西 清

丸岡 明集

由起しげ子

講談社

日本現代文學全集

91

神西清・丸岡明・由起しげ子集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙
山本 健吉



初版 第1刷

昭和41年10月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著者 神西清
丸岡明
由起しげ子

装幀 蟹江征治

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

印刷 大日本印刷株式會社
製本 株式會社 堅省堂

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便番號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振替東京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106914-2253 (1)

(文1)

神 西 清 集 目 次

卷頭寫眞

筆 蹟

恢復期……………七

垂 水……………一八

雪の宿り……………二四

白樺のある風景……………四〇

月見座頭……………五三

少 年……………五五

國語の行手……………五七

詩と小説のあひだ……………五九

散文の運命……………一〇一

堀辰雄への手紙……………一〇八

三島由紀夫……………一二四

チェーホフ試論……………一三一

作品解説……………佐々木基一 四二三

神西清入門……………中村眞一郎 四四九

年 譜……………四五六

参考文献……………四四五

丸岡明集目次

卷頭寫眞

筆蹟

やくざな犬の物語	二七
贋きりすと	一四
同時代に生きる人	一七
靴音	二九
薔薇いろの霧	三四
静かな影繪	四三
詩魂流轉	六六

作品解説	佐々木基一	四五
------	-------	----

丸岡明入門	中村眞一郎	四二
-------	-------	----

年譜		四三
----	--	----

参考文献		四五
------	--	----

由起しげ子集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

作品解説……………佐々木基一 四二七

由起しげ子入門……………中村眞一郎 四三三

年 譜…………… 四四〇

参考文献…………… 四四六

本の話…………… 二六二

警視總監の笑い…………… 二六九

告 別…………… 二七三

指環の話…………… 二七七

矢車草…………… 二八三

一年の間に…………… 二八六

祕めごと…………… 二八九

中國の粟…………… 二九六

神
西
清
集

やがて
一面の
花の
さ
た
は
な
さ
ず
す

千
年
の
花
と
は
清
い

恢復期

美術を介したる人間の像に於ては、
靜安なのが肉體の第一の美である。

——アングル隨想錄

一九二八年六月七日

(熱海)

大いなる熱が私を解放した。私は再び鎔和された人間だ。いま霧のなかから靜かに私の前にたち現れるのは、私の曾て知らなかつた新たな回轉をもつ世界である。その世界にはまだ何一つとして名のついてゐる物はない。この私が多分すべてを名づける者になるであらう。が今のところ私はただ、眼の前にひろがつてゆく此の限りない無秩序を愉しい期待の眸で眺めるだけだ。……いま私は、限りない無秩序と書いた。もう此處に過誤があるのではないか。私は果して、正しく無秩序と呼べるべきものをさう呼んだのだらうか。いや、さうではない——決して。私は四圍から穩かに微笑みかける世界の顔にあまえて、つい不遜な言葉を使つてしまつたのだ。(人間にとつて、記憶といふものを全く剝脱することは大そう難しい事のやうである。見よ、私の再生にとつて大切な今この瞬間にさへ、古い記憶は薄ぼけた汚點となつて忍び込んで、それはやがて私の内奥の全體に蔽ひひろがらうとする氣配を見せるのだ。私は畏れなければならない。)

私は再び何ものによつても汚されてはならない。

現在の私の世界は、一つの平面の上に單調な布置を形づくる幾つかの色と形とから成つてゐる。ここに私が單調といふのは、それらがお互ひに何の觀念的な聯繫をも強ひられてゐないからだ。然しそこには、何といふ調和が憩うてゐることだらう。秩序なぞは欲しいとも思へないほどの靜かな調和が。……私は平和をたのしむ。平和をたのしむ。

朝の食卓で、私は牛乳の壺をひっくり返してしまつた。今そのときのことを思ふとひどく可笑しい。流動する固體といふものがあるだらうか。私は十本の指で、そのこぼれ廣がつた牛乳をひと所に集められるものと信じた。私はその通りにした。私の努力にもかかわらず、牛乳はテーブルクロスにすつかり吸ひとられてしまつた。食事のあとで私は百合さんにこつそりと、そのほんの瞬間の心の動きを話してみた。百合さんは無言で聽いてゐたが、やがてたつたひと言おだやかに笑み崩れながら言つた。

「私にはよく分りませんわ。けれど卯女さまがただお羨しい。……」

六月十七日

一週間も降りつづいた雨で私はまた元氣をなくして、ベッドのなかで暮すやうになつた。妙に白つぱく明るい部屋。雨は部屋の中までははいり込まない。コチンと凝固したやうな室内。ただこの冷たさ、この冷たさをどうしよう。この海邊の温泉町の氣溫が雨に敏感なのか、それとも熱病のあとの私の神経が冷氣に敏感なのか。百合さんはお醫者様を呼ぶ必要はないといふ。私の體溫はほんの少しばかり上つたのに過ぎないから。けれどもこんな微かな雨氣が私の皮膚にこれほど悪い影響を與へるやうなら。……私はまたしても自分の身體について神經質を不安に落込まないわけには行かない。

(午後)

「ま熱つばい睡りから覺めたところ。にもかかはらず、氣分はしつとりと靜まつてゐる。私は自分の二の腕を眺める。乳白の皮脂の間にはもう美しい淡紅が入りまじつてゐる。私は部屋の隅に百合さんの姿をまさぐる。その百合さんの眸が時をり本の頁から私の方へさまよふのを私は知つてゐるのだ。不安を消すために、夏よはやく來ておくれ。」

六月二十四日

やつぱり雨のせみだつた。熱は百合さんが二階から降りて來て、「雨は今しがた岬をまはつて沖の方へ消えて行きましたよ」と告げた言葉とともに、面白いやうに平熱にかへつた。もう雨は來ないだらう。私は健康になるだらう。もうひとつ嬉しい事。——明日の朝から二階の部屋へ移るのださうである。ヴェランダの窓から海を見ることをお醫者様が許して下さいすつたのださうである。

六月二十五日

朝この部屋にベッドを移す。下の部屋ではまるで氣のつかなくつたベッドの新鮮さ、この清らかさ。この部屋がそれだけ明るいのだらう。日かげは九時頃すこし窓硝子の隅のところに見えたり消えてしまつた。今は午後。かすかな、音も立てないぬか雨。濕氣が身體に障るからといつて鎖された窓は、そのうへ厚ぼつたいダンテルで蔽はれてゐる。まるで眼かくしのハンカチのやうに。私はもうすつかり慣れてしまつたので、今ではさほど鬱陶しいとも思はない。

今朝百合さんの肩にすがりながら初めてこの部屋へ上つて來たときの話では、窓の外は海や港を見晴らすヴェランダださうである。

そして私は晴れた風のない午前にはヴェランダに出ることが許されたのである。

六月二十六日

昨日は朝のお茶を濟ませてからこの部屋へお引越しをしたのだつた。私はそのとき自分の脚がひどく弱くなつてゐるのに初めて氣がついた。私は百合さんに倚りかかるやうにしてやつと階段を昇つたのだつた。そして部屋へはいるとすぐベッドに倒れてしまはなければならなかつた。……

(晝すぎ)

私は何時間眠つたのだらう。疲労はかなり恢復したやうである。夕暮だ。百合さんは枕もとの小卓で、さつきから長い手紙を書いてゐる。鈍い海光がカーテンの隙間から天井を濡らしてゐる。

六月二十八日

昨日の朝十時すぎ、百合さんが私のために佛蘭西窓を一ぱいに開けて呉れたので、一步だけヴェランダに踏み出してはみたが、それなりあわてて眼をしつかり抑へて部屋の中へ駈けもどつてしまつた。靜かな朝だつた。私は何を見たのだらう。いや何も見はしなかつた。ただ何かしら、ひやりとした反映が私の額を射たのだ。海？

(その午後)

先刻うとうとと睡つた時、なんだか海の夢を見たやうな氣がする。尤もそんな氣がするだけのことで、忘却の彼方に沈んでしまつてゐる海に何の形も色もありよう筈はないのだけれど。……

それより、もし本當に私が夢を見はじめたのなら、私は何よりも

それを畏れなければならない。忘却が出る門が再び夢へと導くものならば、私にはそんな門は要らない。むしろ私はよろこんで自分の忘却をこそ完成しよう。その完成がそれ自身大きな組立てであることを私は知つてゐる。

六月三十日

百合さんは私が海を怖がつてヴェランダへ出ないのを微笑みながら咎める。私は「御免なさい」といふ笑ひ方をする。この部屋に移つた翌る日から、私は午前中だけソファに起きてゐることにした。私はうつとりと眼を細めてその間ぢゆう睡つてゐる。私は百合さんに訊く、私が小猫に似てゐはしないかと。百合さんは優しくなづく。

七月一日

私がついこの間から始めた此の日記のやうなものは、中味を嚙んだあとの薬包紙をまるめずにとつて置いて百合さんの萬年筆で書いてゐるのだ。はじめの二三度は、百合さんがヴェランダで編物をしたり、お臺所で食事の支度をしたりしてゐるひまに書いて、ベッドの間に挟んで置いた。百合さんはぢきにそれを見附けた。私は禁められはしまいかとびくびくしてゐたがそれは反對だつた。それどころか百合さんは紙を綴るために小さな蟲さしピンをさへ呉れた。その代り一日に三枚だけといふ約束で。けれど三枚は書けない。こんな小さな紙だけれど、そんなに書けばきつと私は疲れるだらう。随分字を忘れてまだるつこい。不思議なことに私の指先はあまり顫へない。

七月二日

私はこの日記を自分の體溫表のやうに書く。指にまだ力がないので、字は不規則な形を描いてゐる。

七月四日

私の朝のメニュー。——パン一片、ミルク、鶏卵、葡萄酒少量。この葡萄酒は昨日から加へられたもので、父がU博士と相談のうへ送つて下すつたものだとの事。父は忙しくて當分こちらへは來れない由。今朝使ひの子供の粗相で卵が割れてしまつたので、食事が九時半になつた。體溫が二分もさがつて氣持のいい朝だつた。それに耳のせみだらうか、今朝は海の音がはつきりと聞えた。膝の上に日射しを迎へるため百合さんに頼んで窓掛を少しだけ引いて貰つた。それで私は港の一部を見ることができた。今度は私が海へ出掛けて行つたのではなしに、海に窓まで來て貰つたのだから私はちつとも怖くはなかつた。港は緑いろに笑つてゐた。港といつても此の半島の幾つかの温泉地を連絡する小つげな汽船が出入するだけのものだといふ話。ちやうど私の見かけた白い汽船は、マストに青い小旗をヒラヒラさせて出て行くところだつた。

七月五日

昨日は白い汽船のことを書いた所でやめてしまつた。私はもう少しあの先を書かなければならない。本當はあの青い小旗が眼にはいつたとき私が急にナイフを落したので、百合さんがびつくりして窓掛を下してしまつたのだつた。私の胸はドキドキいつてゐた。後で聞いたことだが、そのとき私は何か叫んださうである。私は熱の出るのを怖れて、午前中から臥床にはいつてしまつた。熱は出なかつた。

(午後三時)

今朝目がさめてから昨日のことを繰くり考へてみた。忘却といふことがある。もしかすると私の平靜は（ここに幸福といふ字を使つてはいけない。私はいま自分が幸福かどうかといふ事すら意識しないで日を送つてゐる）——ただ忘却に依つてゐるのではないかしら。忘却はその中に身を包まれるとムツとするほど温かい霧のやうなものに想像される。そして人は何か或るものを眼にとめたり意識したりするとき、ふとその物が霧を透して過去の或る記憶に台圖するのを感じることはないだらうか。そしてこれは悪い台圖だ。私はあのとき、汽船の青い小旗のすぐ近くへ登つて行く一つの人影を見た。その姿が私の記憶に台圖したのだ。私はいそいで自分を忘却の底へと突き落した。私の前額にはネットリと汗があつた。……

七月九日

昨日から再び色の調和が私に歸つて來てゐる。昨日も今日も私は書間ベッドにはいない。その代り柔らかな心地のいいソファが私の住家だ。私はここから部屋の中の物を順々に眺めて暮す。

(夕暮)

私は色の變化に突然氣づいた。階下の部屋にはなかつたものだ。この部屋は生きた光を持つてゐる。それは海からちかに此處まで流れて來る。何ものにも吸ひとられずに生きてゐる光。この光は影を持つてゐる。それが色に先づ奥行を、次に變化を與へるのだ。——おだやかな平面の調和が崩れる。もつと複雑な調和が新たに結ばれる。……私は新しい發見の前に眼くるめく。私は心の足もとのようめくを感じる。この新しい調和の世界へ踏み入ることは私にとつて過分だ。私はまだ堪へられないだらう。眼を閉ぢよう、眼を閉ぢ

よう。

七月十日

私はできることなら平和のうちに自分の再生を完成したい。私の現在生きてゐる世界の幼い調和を形づくつてゐる形と色とに、私は知らず識らずに少しづつ陰影を許し與へてゐるやうである。これが不正な假借でありませんやうに。……百合さんと海についての長い會話。私にとつて海は大きな興味である。現在の私にとつて、海は朝夕にやや高まる潮音だけに過ぎない。聴く海。正しさを失はない爲には、私は耳によつて海を理解するより他に途はない。私は百合さんの話をただ遠い國のお伽噺のやうに聞いただけだ。

(午後)

四時ごろになるときつと私は船の汽笛をきく。その頃になると私はきつとマントルピースの上の置時計を眺める。その大理石の女身像はただ白いのではない。その灰色は刻々に變化する。影の量が移りかはる。空氣の濕り工合によつてもそれは影響される。……私は生命のことを考へてゐるのだ。

七月十三日

私は間違つてゐなかつた。私が大理石の像にみつめてゐたのは生命のヴィジョンだつた。私は間違つてゐなかつた。いま午後四時すこし過ぎ、裳の襷が次第に暗く紫色へ移つてゆく女身像をみつめながら、私は自分の胸のあやしい高鳴りに耳を澄ます。

ああ私ひとりの力にはこれは重すぎます。夜になつて電燈の光が部屋を一つの平面に變へてしまふと、あの女身像は冷たい薄笑ひを

浮べた石に還つてしまふのです。私はまだ弱く、私の身うちの力は私一人を支へるのがやつとです。私は一あしも先へ踏み出してはならないのでせうか。ああ私一人の力にはこれはあんまり重すぎます。……百合さんは私の枕のうへに顔をさしのべ、私の涙を丁寧に拭きとつて呉れる。私は幼児のやうに百合さんの眼にすがりつく。

(夜九時)

七月十四日

今朝私は百合さんに頼んであの時計を私の眼のとどこかない所に置いて貰ふことにした。危機は去つた。私はもう人間について思ひ煩ふまい。私は再び快活に色彩ある畫面のなかへ駈け入らう。

七月十六日 (父の手紙)

卯女子よ

百合さんからの手紙でおまへがもう長い手紙が讀めるやうになつたことを知りこの手紙を書く。私がこれまで一通の手紙もおまへに書かなかつたのは醫者の注意もあり私も怖れてゐたからだ。その代り私は百合さんに度々手紙を書き、百合さんからはそのたびに詳しい返事が來た。今朝とどいた手紙は私を心から微笑ませた。その中で百合さんはおまへがどんなに羨しい幼児であるかを書いてゐる。私の見るところではおまへはおまへの恢復期を賢く暮してゐるやうだ。このことは百合さんも力を籠めて書いてゐる。これは私をよろこばせる。私は昨日長い旅から歸つて來た。誰も私を迎へる者のないガランとしたこのアトリエに。あてどもなくさまよひ歩いた信濃の山々。夏近い太陽は何度か私を壓し伏せようとした。私は闘つた。私は自分のスケッチのタッチ毎にどれ程の熱情を感じてゐたかをおまへは想像することができるか。おまへは私の第二の青春を

祝つてくれるか。

だが今この部屋にゐて私の情熱は一瞬の清冷を感じはじめた。私は靜かに思ふことができる。今年にはいつてからの目まぐるしい變轉。おまへのお母さんの突然の死、おまへの理由のわからぬ熱病。私はおまへを百合さんに託して旅に出た。私は百合さんがおまへの容態について書きよこす長い手紙を宿々で受け取りながら本當に長い旅をした。間もなく私はおまへが危険状態を脱し、恢復期の美しい道程に上つたことを知つた。それから後のおまへの状態はひどく私の注意を惹くものだつた。何故といつておまへの生命の呼吸はあまりにも私のそれに似通つてゐたからだ。二つの生命がお互ひに知ることなしに全く同じ相にあつたとも言へよう。昨夜とどいた百合さんの手紙は私のこの想像を殆ど決定的のものにした。私はおまへと同じく幼児だ。私は再び世界を築かうとする者だ。

私と長い旅を共にした風景畫は間もなく私の手を離れるまでになつた。間もなく私はおまへ達と一緒に熱海で暮すことができる。八月になつたらその家へ移らうと思ふ。その家がおまへの氣に入るかどうか。アトリエの隅におまへが學校時代に描いた畫が二三枚埃まみれになつて轉がつてゐる。おまへは随分お行儀の悪い林檎を描いたものだ。それから氣をつけないと卓子から轉げ落ちますよ！……私は少し昔のことを澤山に書きすぎたやうだ。おまへも私も幼児のやうに天を眺めてゐるのだつたつね。百合さんに色々の心遣ひのお禮を言つておくれ。

七月十八日 (卯女子の返事)

お手紙ありがたう御座いました。あんまり長かつたものですから百合さんに讀んでもらひました。御免下さい。おしまひの所にあるお言葉に甘えて卯女は何も申上げません。ただ卯女も、今しがた睡

りから覺めた幼児が崩れた積木を積み直すやうに、自分の世界を組み立ててをりますとだけ申上げませう。輕井澤によい家が見附かりました由、何よりも嬉しく存じます。それからこれは内證ですけれど百合さんはお父様のお手紙を読みながら泣いてゐたやうです。私は百合さんの眼へ眸をやることはできませんでしたけれど、聲が顫へてるのがよく分りました。私は泣きませんでした。この手紙は百合さんの手紙の中に同封させて貰ひます。

七月十九日

熱病とは何であらう。あらゆる記憶を塗りつぶし、失はしめ、そして私にこの白い肉體、淡紅の血脈とを遺して、突然姿をくらましてしまつた熱病とは！百合さんの話によれば彼はこの大ヶ月のあひだ記憶ばかりか私のありとある意識を失はさせてゐたのである。刻々の苦痛や悦びを訴へる感覺すらもが殆ど麻痺してゐたのださうである。やつと一と月ほど前から私に戻つて來た意識は、數ヶ月に亙る空白の彼方に舊い記憶を空しく手探り求めるばかりだ。ああ、ただ空しく。だがそれでいいのだ。私はもう記憶には用はない。忘却の世界はひろいひろい沙漠の彼方に一塊の白堊の塔になつた。無表情なその塔はもはや私に何事も話し掛けはしないだらう。そして此處に十八歳の肉體が……私はそれだけで充分なやうな氣がする。

七月二十一日

あらゆるものの中で海はとりわけ私にとつてたくさんの陥穽に満ちてゐる。私はともすれば翻る波の一襲にも古い記憶の合圖を見るのだ。それはあの白堊の塔に閉ぢ込められた死者たちの棺衣がふと風にひらめくのもあらうか。私がこのあひだ初めて窓ごしに港をひと目見たとき感じた驚きはこれだつたのであらう。一人の船員

が青い小旗の方へとマストを昇つて行くところだつた。海と人——今こそ私は何もおぼえてはあらず、はつきりした想像をする力も關心もないが、何かしらそこからぼんやりと私に呼びかける聲があつたやうである。私はこれ以上はつきり書く術を知らない。そしておそらく私が少しでも過去の記憶の出現について書くのはこれが最後だらう。私は二度とふたたびこんな愚かな眞似をしてはならぬ。

七月二十二日

「卯女子！」

朝食ののちの快い休息をソファに楽しんでゐた私が、どうして扉の向ふ側にあんなにハッキリと父の聲を聴き分けることができたのか、私は知らない。忘却の深い深い底の方からその聲だけがエーテルの一つの氣泡のやうにすばやく浮び上つて來たのである。私はいきなり膝の上の毛布を撥ねのけて扉へ走つた。扉は開いた。私は全く久し振りで父を見た。私の眸は父の濃い鬚にすがりついた。父はしつかりと兩手で私を抱きしめた。そして私は父の肩ごしに美しく笑み崩れた百合さんの顔へ、多分涙とともに微笑みかけた。

七月二十四日

父が私たちと一緒に暮すやうになつてから私達の生活も變つた。私は午後の數時間を父と日當りのいいヴェランダで過すことになつた。靜かな對話の時間。父は餘りたくさんは話さない。父は私と話すときでも海を見ながら話す。私はどういふものか父と一緒に居て眺める海には先だつて頃よく見たやうな合圖の閃きを感じない。父は海の色について話す。私は素なほにうなづき返す。とぎれとぎれの會話。百合さんは窓の中の書卓から時をり眼をあげて父や私と微笑みかはす。

七月二十五日

父は畫架をヴェランダに立てて海に向つてゐる。私は父の傍で溶かされてゆく色彩を眼で追つてゐる。會話は昨日よりも一層稀に交される。――

「卯女子、お前はあの岬みさきの下の海が持つてゐるこの色に氣がついたか。」

「いいえ、お父様。……でもじつと見つめてゐますと、段々見えて參るやうですわ。……もしかしたらそれは、今しがた岬のはづれに浮び出た白い雲の落す影ではございませんこと？」

父はブラシで丁寧ていねいにヴェル・ヴェロネーズを申しながら答へる。

「お前の見方は正しいとも言へる。しかし本當は、この色についてはあの雲だけを注意しない方がいい。これは畫面で言ふところの右寄りのあたりに群がつてゐるさまざまの象やうが混り合つて生れ出た、説明のできない調子なのだから。……」

それからまた暫くたつてから、父はふとブラシを休めて私を振り向いて言つた。

「かうしてじつと流れる雲や飄る波やを見てゐると、お前は物語を思ひはしないかね。もし物語を思つてゐるのなら、その同じ眸でお父さんの畫を見るのはおやめ。お父さんの畫は――その線の一つ色彩の一つもが何も物語つてはゐないのだから。私は記憶のつながりは言ふまでもなく、記憶のしるしさへもすつかり棄てた人間なのだから。私は畫家なのだから。……」

私はびつくりして父の顔を見上げた。物語？ それは私にとつて何といふ思ひがけない言葉だつたらう。私は自分全體がぐらつと揺れ動くを感じて、暫くは何も言へなかつた。何を言ふべきだらう。父はあの波間に閃いたことのあるあの記憶のきざしについて語つてゐる。父はどうしてそれを知つたのだらう。父も私と同じもの

を見たのであらうか。もしさうでないならば、父がそれを見てとつた場所といへば此の私の瞳孔の中より外にはない筈なのだが！……數分たつてから、私は顫へる聲を抑へてやつとこのことで答へた。

「私は、私はその畫家になりたうございますの。」

私は私の手の甲のうへに溫い父の掌を感じた。……

七月二十六日

（午後三時）少し長くヴェランダに居たせゐか輕いめまひがしたので臥床に横になつたが、その間にうとうととしたらしい。目が覺めるとじつとりと額に汗をかいてゐたが、氣持は見ちがへる程爽やかで快かつた。ヴェランダで百合さんの響きのいい笑ひ聲がした。それが如何にも面白さうなので跳ね起きてビジャマのまま飛び出して見たら、これはどうした事か、父のバレットに百合さんの毛絲の鞆たもとがくつついてゐた。百合さんはクックツと笑ひながら取らうとするが、絲をよごさずに巧く取らうとするのでなかなか取れない。あべこべに解けた絲までがベタバタと繪具の上にくつつく。父は傍に立つて穩かに笑ひながら見てゐた。百合さんは私の姿を見ると雛ひな栗のやうに紅くなつた。私はその百合さんをひどく可愛らしいと思つた。

七月二十七日

昨日の夕方の汽車で父は東京へ歸つた。ヴェランダに小さな卓子を用意してお別れのお茶を三人でいただいてゐたとき、父は私に一冊の鼠色の本をくれた。それがこの本だ。アングル隨想錄。私の恢復の第一のしるし。はじめて許された讀書！

七月二十九日

暑すぎる時には日覆を半ば引いて、ヴェランダの午後の一時間あまりを『アングル』とともに過すのが私の日課になった。私の足もときには百合さんの毛糸の鞆が轉がつて。……あんなに好きだつたフランス語も不思議なほど忘れてしまひ、今ではもう殆ど思ひ出すこともできない位なのだが、それでもこの本のつましい忠實な譯者のお蔭で、行と行の間に優しい原文の息吹きを時を感じることのあるのはひどく嬉しい。何よりも古典を貴ぶことを知つてゐたこのすぐれた畫家の言葉を傳へたこの本を、私の恢復期の讀物にと與へた父の氣持も私にはよく分る。大いなる熱によつてすべてを失つた私が先づ何から始めるべきかについて、父が無言で指し示してくだすつた道がここにある。この本はまつたく私を楽しませる。私は傍に百合さんの居ることも忘れて、毛糸の鞆が足くびに觸つたのにびつくりして跳び上つたくらゐだ。

七月三十一日

午後になるとヴェランダでの讀書。『アングル』の鼠色の表紙の親しい感觸を指の腹に感じながら何といふ和んだ氣持。今まで讀んだところでは、色彩についての章が一番ふかく私の心をとらへた。デッサンについてのアングルの感想は深い啓示に満ちてゐる様に思へるのだが、どうも私の心のすべての弦を一どきに鳴りひびかせると迄は行かないのである。私の眼の下には緑色の海が搖れてゐる。午後二時になるときまつて港を出てゆく小さな汽船がある。海邊から丘の中腹にかけてひろがつた温泉町の靜かなひとみ。思ひもかけない崖や家の背戸から時をり眞白な湯氣が立ち昇る。……すべてこれらは父がその短い滞在中に畫板の上にとり入れた懐しい風景だ。私は父が畫家として私を顧みながら語つた幾つかの言葉を思ひ

出す。私は海や町の湯氣を眺め、それから色彩についてのアングルの言葉を讀む。とりわけ、私は岬のはづれの波の色を注意して眺める。父がヴェル・ヴェロネーズをその襷々に塗り疊んで行つたあの波の祕密を。アングルの言葉、——「生ける肉體中には白いものは皆無である。何一つ絶対に白いものは無い、總ては相對的だ。白さで輝く婦人の側へ一葉の紙片を置いてみよ！」

八月一日

海を見る朝々。アングルを讀む晝さがり。その間に私の想ひは日ごとにととのつて行くやうだ。私は海の色が一日一日と深まるのを感じる。

八月六日

明日は輕井澤へ移る日だ。百合さんは此の家の爺やを相手にお支度に忙しい。私は何も出来ないから、ぼんやりと窓の外を眺めてゐる。つややかな椿の葉が眼にしみるやうだ。(壁にかけてあるロートの『濱邊』は忘れずに羽根蒲團の間に入れること。)

八月九日(輕井澤)

昨日の朝この家に着いたきり、父と百合さんの勧めで晩方まで臥床の中におとなしくしてゐたので、まだ此の土地については何も知らない。今朝九時すぎはじめて庭に向いたバルコンへ出てみた。海邊の温泉町と此の高原とでは何といふ物珍らしい違ひ方だらう。一日まで私を包んでゐたムツとする様な大氣。流れようとせずつにホツと現はれてはまた消えてゆく白い雲。岬や海や、赭土の切崖や旅館の窓や、そして船までもがみんな睡つたやうに靜まり返つてゐ